50

『高く尊き看護婦の使命』（昭和8年刊）にみる医師 二木謙三の看護観

平尾真智子
順天堂大学医学部医史学研究室

東京看護婦学校は看護婦規則による検定試験制度により資格取得をめざす生徒のための大規模校で，大正6年大日本看護婦協会東京組合により運営された．大正12年校長に就任した二木謙三は同窓会に依頼され『高く尊き看護婦の使命』を著した．本書を分析し校長としての看護観を明らかにしたい．

二木謙三は明治6（1873）年秋田市樋口家に出生，幼時二木家を継嗣．明治30年帝国大学医科大学入学．明治34年東京駒込病院に就職．明治38年ドイツに留学．明治42年駒込病院副院長，帝大講師，医学博士．明治44年より「修養団」の賛助員．大正3年伝染病研究所技師兼帝大医学部助教授．大正5年防疫官，大正6年帝大付属分院内科医長，鼠咬症スピロヘータを発見．大正8年駒込病院長となり，大正10年帝大教授を兼任．大正12年修養団理事となり，青年の健全育成ための指導，腹式呼吸や玄米食健康法の提唱を行う．大正15年日本伝染病学会を創設．昭和8年還暦にて役職を退官．記念に『二木博士講話集』が編集される．昭和21年修養団の団長となる．昭和30年文化勲章を受章．昭和41（1966）年老衰にて93歳で没した．主な著作には『栄養の適応と体質改善』，『健康への道』『食物と健康』『腹式呼吸』『内科学』などがある．

看護との関係として，二木は明治41年に発刊された大関和による『実地看護法』の校閲を担当している．本書は看護婦自身が著した看護書で，大正15年には5版となりよく普及した．大関は桜井女学校でツルーやベッチに看護を学んだ後，帝大病院で外科の婦長を経験し，大関看護婦会を経営した看護界の重鎮である．また二木は大正12年から昭和26年に廃校となるまで東京看護婦学校の校長に就任し，同窓会長も兼任し，同窓会誌『光明』にも執筆している．

『高く尊き看護婦の使命』は縦19cm全58頁の小冊子で東京看護婦学校同窓会による発行である．目次は1. 高く尊き看護婦の使命，2. 善き日本の看護婦，3. 外国と日本は同じでない，4. 祖神の国日本，5. 祖神とは何であらるるか，6. 土地生命財産一切が祖神のもの，7. 九千万人皆悉く兄弟（附）日本の信仰，8. 看護婦嫌いが好きになる，9. 無心の孝悌，無心の看護，10. 栄養の問題，11. 看護上の注意，12. 保健上の注意，13. 予防上の注意，14. 結語，となっており，このうち10. に約20頁を当てている．1. においては「人にはそれぞれ与えられた使命があり，看護婦は病める国民の母たる重大な責務を負うところの高く尊き女性である．この道に従事する人は常に自己の使命の重且大なるに鑑みて，慎み戒め，小なることもおろそかにせず，大なる事にも怖るることなく，小心に且つ勇敢に我が身を処する覚悟がなければならぬ．学問にもそのつもりで精を出し，実行にもそのつもりで邁進せなければならない」，「人の使命は，実は祖神より定められたものである，即ち各自の仕事は皆祖神の御命令によって与えられたる高く尊き使命と心得て，一心不乱に一生懸命にその目的達成に猛進すべきことである」とし，2. では，「善き看護婦は勿論善き人で又善き婦人であらねばならぬ」，9. では，看護は無心で行うものであるとし，11～13では，注意事項を箇条書きしている．14. で，「日本の看護婦の責務は斯くして重大である，深甚たる自重を望むのである，正しきものよ祖神は助くる」と結んでいる．この冊子は3,500部印刷され，全国795ヶ所の看護婦養成所の生徒25,058名に対し2,470冊が送付され普及した．

校長としての二木の生徒に対する訓育，看護観は，病める国民の母たる看護婦の尊い使命の自覚と精進，善き婦人であること，無心で看護を行うこと，正しい者には祖神の加護がある，というものであった．人の使命や善き人間，祖神の加護などは，「修養団」理事としての青年に対する啓蒙活動における主張と同様のものであり，二木の一貫した信念と考えられる．